



日本
国語
大辞典

おは—かつほ



日本國語大辭典

第四卷

編集 日本大辭典刊行会
発行 小学館

日本国語大辞典 第四卷

昭和四十八年七月一日 第一版第一刷発行 ©
昭和五十五年七月一日 第二版第六刷発行

編集 日本大辞典刊行会

発行者 相 賀 徹 夫

印刷者 小 林 清

発行所

株式会社

小 学 館

東京都千代田区一ツ橋二一三ー一
〔郵便番号〕一〇一〔振替〕東京八二二〇〇

造本には注意しておりますが、万一落丁・乱丁などの不良品の場合は、おとりかえいたします。

おはを「尾羽」名。鳥の尾と羽。万葉一〇・一八

三〇「うちなびく春さり来れば小竹し」の末う

れに尾羽をやはらぐと触れて驚鳴くも作者未詳

曾丹集「や見ればわが夏かひのくかへり鳥來に

けりとおはぞしなへる」天草木伊曾保孔雀と秋來の

事「ナクナクカラスノナクニクワワリ、Yotano

(ラハヲ) スポメテカガミ、マワツタ」(閑園金)オ

ツバオバ(秋田) (鑑之団)

おはうち枯れる「おは(尾羽)をうち枯らす」に同

じ。浮世草子「昼夜用心記四・五」この浪人を見

て尾羽次第にかれ行くにしたがひ。浄瑠璃・菅原

伝授手習鑑一「不義より御所を追出されさむい暮

しを素浪人。おは打かれし武部(たけへ)夫婦。浄

瑠璃 伊賀越道中双六六「昔の残る風俗も、尾羽打

枯れし松蔭に、伴ひ入るや西日影」

おはまうち枯らす(鷹)の尾羽の傷ついたみすば

らしいさまから。おちぶれてみすばらしい姿にな

る。零落する。尾も羽もなし。咄木・鹿の巻筆

二・四「永々の浪人にてををうちからし」浮世

草子 武道伝來記七・二「久敷牢人にて此里にねぐ

らの鳥の尾羽打ヲ(ハウチ)からし此身の果のなれ

る。浄瑠璃・出世景清一「からからと笑ひ、是お

侍、某はおはをからせし鎌倉の浪人者にて候が

おは(御葉)名(おはは接頭語) 菜(な)をいう女性

替して生業とす。一夜代六百文とぞ。浜萩(庄内)

「遊女をおは略し物領むすめをば内に残し、二番目

より売出すよして、例のおちおはのとなへ用る

なるべし」(4)「刑事をおは」看守をいう、盗人仲間

の隠語。「隠語輯覧」(因園)次女以下。妹。青森県

津軽・岩手県中通地方110 秋田県154 山形県044 福島県

173 越後41 新潟県423 石川県羽咋郡40 千葉県安房郡

044 三重県志摩郡03 隠岐76 ②弟の妻。石川県河北郡

440 ③嫁。岐阜県大野郡白川539 ④独身の婦人。福井

県458 飛騨539 和歌山県682 福島県05 佐渡外海府830 高

知県安芸郡中山80 長崎県五島044 ⑤僧侶の妻。福島

県174 千葉県津郡274 佐渡島403 ⑥ばかな女。福島

県160 ⑦情婦。三重県度会郡610 ⑧ばかな女。福島

県181 新潟県西頸城郡428 ⑨(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

語大辞典)松岡静雄。ヲバハ(小母)の義(日本古

①老婆。老女。または祖母。おばあさん。社会百

面相内田魯庵「ハイカラ紳士」上「傲慢で生意気好

(い)いお婆(バ)のくせに色気沢山(たつぷり)で

「日本橋(お婆)一〇」余り評判のよくない阿婆(お

バ)が、台所から跨込(たぎ)こんで、帳面を控へ

て切盛をする」(2)江戸時代、深川の岡場所などで

遊女の監督、世話などをする女をいう。洒落本・仕

懸文庫四「おふさん、はばかりだがの、たばこと

紙をおばあにさういって、とりよせてくんねへし

やうだにヨ」略よせばにおばあといふありて子供

のせはをやくなり」(3)女郎。遊女。おは。湯の垢

「ごだおばおばおらいらぬ」随筆・筆まかせ二「当

所にて女郎の事をおばあといふ」(因園)未婚の婦

人。千葉県印旛郡261 飛騨539 山口県柳井おばあを

している結婚していない」71 ②乳母。島根県仁多郡

712 ③次女以下。山形県庄内60 茨城県201 千葉県060

おはあさま(御祖母様・御婆様)名(おばばさま

御祖母様)の変化した語「おばあさん」よりやや

改まった方。青年森岡外三「純一は国のお祖母

母(バ)あ様(サマ)の腰が曲って耳の遠いのを思ひ出

して、銀の匙(中助助)前「祖母がなくなつて

から大切にしてるたが」(因園)オバアサマ(おばあ

サマ)オバアサマ(おばあさん)オバアサマ(おばあ

さん)オバアサマ(おばあさん)オバアサマ(おばあ

こだからねえ」(因園)オバアサン(おばあさん)

おばあちゃん(おばあちゃん)は接尾語さんの変

化したもの。幼児などが、祖母または、年寄りの女性

を親しむ語。また、盛りを過ぎた女性が自嘲

的にいう語。大阪の宿水上滝太郎一七「年輪

は?もうおばあちゃんだつせ」(因園)オバアチヤ

ン(おばあさん) (余之)

オパーリン(Aleksandr Ivanovich Oparin アレクサン

ドルイワノビチ)ノ連の生化学者。生命の起源に

関する学説を提唱し、広い支持を受けた。主著「生命

の起源」名。一八九四年生。(因園) (余之)

オパール(名)(英Opar)数パーセントの水を

含む二酸化ケイ素を成分とする鉱物。乳白色の地に

赤や緑のチカチカした輝きのあるものは、ノール

オパールといひ、みがいて宝石とする。主産地はメ

キシコとオーストラリア。一〇月の誕生石。蛋白石。

*乳姉妹(糸池幽芳)前八「色異いろがはりのオパ

ール、さては珊瑚、真珠なんどの髪飾り、縮図(徳田秋

声)素描八「愛らしい指に、サハイヤやオパールの指

環が遠に光り出し」(因園) (余之)

オパールいろ「色」名。オパールの色のような乳

白色。青春(小栗風葉春)一「繁吹ひぶきは虹

を吐き、サツとオパール色の幕を張って、*負しき

人々の群(宮本百合子)七「霧が彼方の耕地の末でオ

今日の物語上、大人げなき親をもち、御はもしに御座候へども、*女中詞(元祿五年)「おはもし恥し」*浄瑠璃・頼朝浜出「いくさは是がははれ也。しや御めんあれおはもしとゑがはしてこそ立にけれ」*歌舞伎・真操花鳥羽恋塚六立「おはもしながら今宵の固め」(園圃論之四)余之④

おはもし「い」(形口)「おはもし」を形容詞化した語。恥ずかしい。*歌舞伎・名歌徳三紳玉垣五立哥詠(よもふとは厚皮者(あつかはもの)恥を知らぬと思し召もおはにもやふ存じます) *歌舞伎・絵本合法備六幕「ほんに此やうなおはもし、さもしい事」 *春雨文庫(和田定節)一五「十七八の新造(しんぞ)のやうにお耻(ハモ)じいと言ふ訳がらにても有りやすめ」

おはもし「さ」(名)「おはもし」の語幹に接尾語「さ」の付いたもの。恥ずかしいこと。また、その度合。*仮名草子・薄雪物語下「仰せのことく、過し世はなれなれし御言の葉、さてきて御はもしさにて候」*浄瑠璃・義経千本桜「御望と有故、拙(つたない)舞ぶりお目にかけ、おはもしさま」

おはもし「さま」(御は文字様)「形動」(さま)は接尾語。「おはもし(御は文字)」をさらに丁寧にした語。*浄瑠璃・生写朝顔話「宿屋」拙(つたない)しらべも*お笑ひ草、おはもしさまと会釈する(園圃論之四)余之④

おは「御早」(名)「お」は接頭語。早打(はやうち)を丁寧(丁寧)という語。急用を知らせること。また、その使者。

おは「よし」(御林)「名」(お)は接頭語。江戸幕府直轄の保護林。幕府御用木と公共土木用材の補給を目的として幕府領内に設定されたものが大部分で、御林奉行の所管に属したが、今日の保安林に相当するものも少なくなかった。料所林、公儀林、御立山、御山ともいう。なお、私領での同種の保護林は、御本山、御直山、御山、御留山、御建山ともいった。ともに明治初年に官林に編入され、のち、国有林となって今日に至っている。*財政経済史料三・経済・物産・官林揭示・元祿一五年閏八月「富士山御林・木、近年致奔伐、炭焼出候由其聞有之候、従先規炭焼之儀は不_レ及_ニ申、野火等まで停止之処、不屈之至候、彌以炭焼野火等堅可_レ為_ニ禁止事」

おは「やし」(御囃子)「名」(お)は接頭語。能楽、歌舞伎などで、拍子をとったり、雰囲気を出したりするために奏する。囃子(はやし)かた。*人情本・春色梅美婦欄二・一「何だか古風(じだ)い」な言立したのウ。鳴物師(オハヤシ)でも頼まふか。*武家名目抄、儀式部「御囃子」御前御ひかへの内に御はやし有之。高砂・観世進藤、呉服、定十郎進藤、善界・観世進藤、右相渡退出但拜領物有_ニ之。*平凡二葉亭四迷二〇

「阿爺(おとつ)さんが天狗になってお囃子(ハヤシ)を行(や)つてるのぢやないか」(園圃論之四)余之④

おは「やし」を「小林」(名)「お」は接頭語。林。*書紀「皇極三年六月、歌謡(鳥屋野(オバヤシ))に我を引き入れて、鉏(あ)し人の面(おもて)も知らず、我も知らずと。*万葉一四・三五三八「広橋を馬越しがねて心のみ味がら遣りて吾は此処にして、或る本の歌の発句に曰はく、乎波夜之(ヲバヤシ)に駒を馳(は)ささげ_ニ東歌」

おは「やし」あらため「御林改」(名)江戸時代、幕府勘定方役人が直轄林の木数や管理状況を調査すること。*財政経済史料三・経済・物産・官林書上方・寛政五年三月日「御用木伐出、或ひは御林見分等被_レ差出遣候得共、御林木数等多分増減不取締に相聞候間、此度之儀者別段之御趣意を以御林改方被_レ仰出候条」

おは「やし」かた「御林方」(名)江戸幕府の職名。勘定所の方(かた)が、もっぱら幕府の用材と営林に関する事務を掌管した。御林奉行とは別個な職。*財政経済史料四・官制・勘定所職制・勘定所分課・天明五年九月日「御林方取扱一、知行渡御林添、私領上知御林組入御添帳、是者、諸国御林帳御林奉行預り有_ニ之に付、知行渡御林等、其引渡候方より御林帳除之儀相同候節、断之趣を以書書する也」

おは「やし」し「御林木」(名)江戸時代、幕府の御林帳に登録された立木をいう。伐出しの時の立立改めには、幕府の普請役、代官手代が当たった。*財政経済史料四・官制・勘定所職制・勘定所分課・宝暦四年閏二月一日「御林奉行今迄は御林木数帳面に認置、御林木増減有_ニ之候得者、其訳御代官より相届候、御林帳木数より増減等帳面に相改候迄に御座候」

おは「やし」し「御林伐出」(名)江戸時代、幕府直轄林の払い下げをいう。*財政経済史料八・官制・勘定所職制・延享二年九月日「国々御林伐出願吟味之事、是は、売木伐出之請負願人有_ニ之候節、其場所支配之御代官御預所役人へ申渡、遂吟味、前々より宜場所、被_レ立置候場所、并木筋官御用木伐出、津出し御場所、并々御東麓山有_ニ之場所、或其津出、山出之道筋、田畑、堤川除等、相障候場所等は相除、伐出し不_レ申付、其外御林伐出、洪水等之節、田畑障可_レ成分は抜伐に為_レ致、并御用木に可_レ成横、横規等之上木、又は格別之大木は、不_レ伐候吟味を語」

おは「やし」し「たかせん」(御林下草)「名」江戸時代、小物成(こものなり)雑税の一つ。地頭林および幕府直轄林で、飼料や肥料にする草、薪や枯損木等を採取する村方が納める低額の役銭をいう。*地方凡例「緑五」一御林下草銭、是は公儀地頭林の下草を村かたにて刈取る役永也。地の広狭に由て前々より定納になり、小物成の内也」

林の状況を詳しく記した台帳。*財政経済史料三・経済・物産・官林書上方・寛政五年一〇月日「御林帳之面木数計間致_ニ相違_ニ候も有_ニ之候」

おは「やし」し「おはらし」(御林奉行)「名」江戸幕府の職名。勘定奉行に属して直轄林の管理、経営を担当した長官であるが、御林方の分立後は、御林の保護、監察および造林に関する諸務を掌管した。私藩では会津藩を除き、そのほかでは同一職を山奉行、材奉行などといった。*財政経済史料四・官制・勘定所職制・勘定所分課・宝暦四年閏二月一日「一、今度御林奉行就_レ被_レ仰付候、御為第一に奉存。聊以御後關儀不_レ仕。跡々より被_レ仰出候御条目之趣堅相守」

おは「やし」し「御林守」(名)江戸時代、おはらしの直轄林の監守人をいう。有給、専任の者は少なく、多くは地元村の庄屋(名主)にこれを委嘱し、無給である代わりに、御林の枯損木や下草の採取をその村方に許した。(徳川幕府県治要略)

おは「やし」し「御早」(名)「お」は接頭語。*形容詞「おはやし」の連用形「おはやく」の変化したもの。①相手が早く出てきたことに対する挨拶のことば。*浄瑠璃・最明寺殿百人上臈・女勢揃へ「いづれもこれはお早ふと、物静か(な)ご候候」 ②朝はじめて会う時の、挨拶のことば。*人情本・春色恵の花二・九回「おいらんお早う。おねむそふだね」*小公子「お早松殿子訳前編」五、お早う、僕ね、ここに居るの知りませんか。*美真人草夏目漱石「三、練樹粉(ねりはみがき)と白楊子が御早うと挨拶してゐる」

おは「やし」し「入場券」(名)江戸幕府の御林帳に記したことをいう。盗人仲間(ぬすびと)の隠語。「隠語構成様式并其語彙」(編)丁寧(丁寧)の「ごさります」(ごさいます)などを付ける。①の意の例。「これはおはやうございます。おつれ様はおいくたり。(滑稽本・東海道中膝栗毛上・上)」 ②の意の例。おとうさん。おはやうございます。(尋常小学読本 明治三六年)二二 (園圃論之四)余之④

おは「よし」(小原)「名」「おはらさかすき(小原盛)」に同じ。*閔秘録五「螺盆の事」略「小原は小原権兵衛と云もの。元祿の比仕出す」。*談義本・教訓統下手談義一五「総廻向(上戸)が禁酒して、又そるそると持病が気さ(小原)ラ(ハラ)で一つばかりは大事も有ま」と。*雑俳・柳多留「一五、長いもを小はらへとって子にあつけ」

おは「ら」(御腹)「名」(お)は接頭語。①ある人を敬んで、その腹をいう語。*三河物語三(大久保家子孫

への教訓)「相国様に御腹を切らせ奉らんと有りけれ共」 ②当人を生んだ婦人。生母。また、その婦人から生まれた人。*巷街贅説六「御十二代將軍左大臣家慶公、太政大臣家齊公御次男、御幼名敏次郎君、御腹押田氏女の方」 ③腹、お切りになること。切腹。*三河物語三(武田勝頼との戦)「天正六年八月、御年廿にて、十五日に御腹を被成けり」 *歌舞伎・杜若艶色紫・序幕、僅かな越度を種として、佐野の親子が讒言にて、七年以前、父さんは、いとしやお腹(ハラ)なされたわいなア」(園圃論之四)

おは「ら」(大原)「名」(おはら)とも。姓氏の一つ。*園圃論之四

おは「ら」(大原)「名」「おはらみこ(大原巫子)」に同じ。*雑俳・軽口頓作「いるものじや、得て供部家におはらどの」

おは「ら」(小原)「名」神奈川県相模湖町の地名。甲州街道の小仏と吉野の間、甲州へ向かう上りの旧宿駅。*園圃論之四

おは「ら」(御腹)「名」(お)は接頭語。①不用の物などを売って処分すること。また、その物。②物の代価を支払うこと。また、その金銭。多く女性が用いる。*雑俳・柳多留「一〇、御腹がすつかずかたどどこほり」 ③罪人などを追放すること。また、その刑。*浄瑠璃・夏祭浪花鑑二「団七が各とが」を赦(ゆる)し、明日当所をおおひ、有難う存せよ」(園圃論之四)余之④

おは「ら」(御腹)「名」(お)は接頭語。①神社で出す厄よけのお札。特に伊勢神宮で八座置神事(やつくらおきじんじ)の祓(はら)いで毎年全国の崇敬者に配った大麻(たいま)やお札。おはらいいぐし。*虎寛本狂言・素襖落「先こなた様へはめでたうおはらひ、おく様へはいせおしる、稚子様がたへは愛らう筈のふえをませませ」 *浄瑠璃・国性爺合戦二「日本の地はなる共神は我が身にすずがは。太神宮の御腹(ハラヒ)、納受がかなからんやと」 *談義本・風流志道軒伝二「御祓(オハラヒ)は屏風の内に鎮座ましし志、持仏は半轡の上に来迎あり」 ②罪や災いを除くために六月と二月の晦日(みそか)に行なう儀式。また、特に「おはらいまつり」のことをいう。*浮世草子・好色二代男「三五、御祓(ハラヒ)ども越(こ)えてつつけ、七月には淋しがりやにおこと、さてもさてもむごひ物語。*浄瑠璃・曾根崎心中「ほんに正月其うへに、十夜おはらひすすは一度にする共から有ま」 *浄瑠璃・長町女腹切上「来年のおはらひには必くだりや」 ③「おはらいまつり」での神輿の行列。*浮世草子・好色五人女二「鼻高く良(か)は、赤く眼ひかり住吉の御はらひの先へ渡る形の



大原女(七十一番歌合)

いふを、東国にて、かまはらひといふ
おはらめ【大原女・小(原女)】**名** 京都北郊の大原や八瀬から、黒木や炭などを頭にのせて、京都の町へ売りに来る女。おもむきに手も

脚絆(てつこうき)をはく。独特な風俗が有名。おはらめ。*七十一番歌合九番小原女。あこせはまひりあひて候けるか。俳諧・新花摘「小原女の五人揃ふてあはせかな」。虞美人草・夏目漱石「一爪上(つまあげ)りなる向ふから大原女(オハラメ)が来る」。歌舞伎所作事。変化物。長唄。二世瀬川如卓(じょう)作詞。九世竹屋六左衛門作曲。文化七年(二八一〇)江戸中村座初演。奉掛色浮世図画(かけたま)つるいろのうきよさの中の一つ。おかめの面をかぶり、小原女の姿をおかきまりとなり、引抜きで奴姿になり、「国入奴」を踊るのがきまりとなっている。【因園】**名** 余之。【おはらめ】**名** 大原女にかたどった人形。顔や胴体をまわらで、着物や手拭を紙で、たきをわら束で作る。【因園】オハラメニギョー【備之】

おはらめ【大原者】**名** 京都北郊の大原の里から黒木を売りに出る人。*雑俳・寄太鼓男じや男じや男じや尻つめりや目をむき出す小原者
おはらりゅうををらりゅう【小原流】**名** 華道の一流派。明治末期池坊流出身の小原雲心が開く。自然で写実性の強い盛装華(もりへい)かを創始。初め国風盛花(くにふりもりばな)、小原流国風盛花、最近是小原流(挿花さうか)を名のる。【因園】オハラリョー【備之】

おはらわん【大原腕】**名** 京都北郊の大原で産する腕。*俳諧・真山集一〇・秋「影おしき月のおかさや大原腕(勝車)」。*和英語林集成(初版)Ohara オハラ阿針【2】裁縫をする人。遊里や商家に雇われて針仕事をする女。おはらめ。おはらめ。お針女。*浄瑠璃・五十年忌歌念仏「中」ま一度振袖見せたさにみなおはらめが縫ふたれど。祝ふて我も縫はんとて片袖ばかり縫ふ顔して。*洒落本・辰巳之園「自序」茶屋の女房を一流(いちち)うに伯母様(おふんさん)と呼。*外お針・隠居さんなどの通言(つぶごん)あり。*雑俳・柳多留「一三」しんめうをおはりとてしかられる。*滑稽本・浮世床「上」おらが裏の年明が、今客の世話に為(な)つて居るが、縫物が出来ねへから月唄(つきやとひ)のお針を置くのさ。【3】(1)する裁縫をすること。針仕事。*雑俳・元祿風韻「お針し

て秋も命の緒を繋ぎ古古益々琴引く娘八つになりける芭蕉。*生田山花袋「四」え、国でお針と一緒に買ったお友達ですって。*桑の実鈴木三重吉「二」女のすべきお針さへも略(りやく)またやつと一通り道が開いたくらゐのこと。【因園】**名** 余之。【おはらめ】**名** 裁縫を手仕事にしている女をいやしめていう語。*浄瑠璃・自然居士「一」お出入おはりかかこはぎと申ものなるが。【因園】**名** 余之。【おはらり】**名** 裁縫の稽古のために、または、雇われて、裁縫する娘。針子。【因園】裁縫の稽古に通っている娘。岐草555 兵庫御63 和歌山676。【因園】**名** 江戸の郊外堀之内(東京都杉並区堀之内)日山妙法寺祖師堂で参詣者に出す護符。これを受けて病人の枕もとの柱に張っておき、七日目ごとに上へ張り上げると、二日目には全快すると信じられた。古いに難病または長わすらいの人は二日過ぎると、古い札を返して新しい札を受けて張りなおした江戸神仏願懸重宝記。*歌舞伎・名歌徳三姉玉垣「三立」お張御符の印も見へず、次第に重おも帝の御惱(このふ)し。*人情本・春色梅児誉美三「一五」齋「ヤレ医者どのへ業取に行たの、保里の内へお張御符(ハリゴフウ)をいただきにやちやと、延引(ひっぱり)てほど止留(とめ)られちゃア」。*歌舞伎・三人吉三郎初買五幕明日お張御符(ハリゴフウ)の張替だから、堀の内様へお参り申し。【おはらりし】**名** 御針灸(おはらりしめ御針灸)に同じ。*滑稽本・浮世床「上」昼お針灸(ハリシ)が斯(か)るかう云ひしたからいつそ腹が立て腹が立て、くやくてなりいせん。*洒落本・青楼籠の花前章「又お針灸(ハリシ)のところへ豆煎の催促(せま)アねへか。【おはらりし】**名** 遊女屋などに雇われて遊女たちの着物を縫ったり、つくろいものをしたりする女。おはらりし。*洒落本・青楼籠の世界錦之裏(わた)くしが袖をば、おやぶなんすし、又お針灸(ハリシ)に小言をいはいはれんす。【おはらりださかたにじれん】ををらりださかた【小憩田坂田尼寺】奈良県高市郡明日香村にあった豊浦寺(とゆらでら)の別称。また、小憩田坂田尼寺の略称。【因園】**名** 余之。【おはらりだのまい】ををらりだのまい【小憩田舞】**名** (おはらりだ)は、推古天皇時代(推古天皇二年一〇月)以降の都であった地、推古天皇は一般に小治田宮治天下天皇(おはらりだのみやに)あめ(の)したしるしめしすめらみことと称せられた。推古天皇の時代に作られた舞、の意か。外来楽に対する「倭舞(やまと

まい)の一つか。*書紀天武二年正月「是の日に、小憩田舞、及高麗百濟新羅三国の楽を庭中に奏(つかまつ)る」。*新日本紀「一五」小憩田舞兼方案之、小憩田宮朝所製之楽歟。【おはらりだのみや】ををらりだ【小憩田宮】推古天皇、皇極天皇の皇孫。推古天皇(一年六〇三)、豊浦宮から移り、一六年間都とする。のち、皇極天皇元年(六四二)、再び都となったが、翌年飛鳥板蓋宮に移った。奈良県高市郡明日香村(いかすち)付近、または同村岡にあったといわれる。小治田宮。【因園】**名** 余之。【おはらりべや】**名** 裁縫をする女たちのいる部屋。*洒落本・青楼籠之世界錦之裏(おはらりべや)もみてきなんし。*洒落本・廓御針「聞なんし。此ちも、旦那さんがわちをお針(ハリ)ペヤへよびなんして、段々と遠廻しのひけんが有いた。*人情本・珍説豹の巻「前下」お針部屋(伴ひ入れ、茶煙草の火も人憑(た)のます自身に運ぶ愛相の姿を見るも泪の種。【因園】**名** 余之。【おはらりや】ををらりやとひ【御針灸】裁縫をするため雇われること。また、その人。*たけくらべ(樋口一葉)九「もとは檀家の一人成しが早くに良人(おつと)を失なひて寄る辺なき身の暫時(しばらく)ここにお針(ハリ)やとひ同様、口さへ濡らさせて下さらばとて。【因園】**名** 余之。【おはらり】**名** 威張り散らす。どなりちらす。名古屋579。【おはらり】**名** 物をねだる。岐阜県上郡541。【おはらり】**名** 背負う。おぶ。*一茶方言雑集「おはらり子など背負(か)うこと。【おはらり】**名** 動物などがうみを持つてはれる感じ。高根県那賀郡04。【おはらり】**名** 山口県豊浦郡09。【おはらり】**名** 身分不相応の服装をする。高根県那賀郡下国府04。【おはらり】**名** (お)は接頭語。【1】晴れの着物。晴れ着。また、それを着た姿、様子。晴れ姿。*滑稽本・浮世風呂「前」序「なべて世の中の人心は銭湯の風(しらみ)に等(ひと)しく、善悪に移り易き物なれば、略(りやく)田婢(やまだし)をんなの湯具(ゆも)から令室(しんぞさま)の網巾(オハレ)へも移る」。*滑稽本・浮世床「上」開帳(けい)ちやう(へり)と芝居(し)ばやと、あれが舞の所(とけ)へ舞の来た時と、タッタ三度しきやアお晴(ハレ)をしねへときて居るから、なんほ付(つか)ねへと云ても彼是(かれこれ)が物(は)あらうす。*夜行巡査泉鏡花「三」あまた白と紅(あか)との三枚(まい)さんまいがさわで、ト羞(は)つかしやうに坐った恰好(かっこう)うといふものは、あや婦人(あやめ)をんなが二度とないお晴(ハレ)じだ。【2】貴人が外出、出席すること。御成(おなり)。*明応本節用集「御晴(ハレ)公方御出」。*運歩色葉「御晴(ハレ)」。【因園】**名** 余之。【おはらりく】**名** 因園①未婚の老婦人。和歌山県日高郡上南部02。鳥取県西伯郡09。②おろかな女。高根県兼川郡修理免75。【おはん】**名** 歌舞伎所作事。清元。二世松田治助作詞。清沢万吉作曲。本名題「道行思案余(みちゆきしあん)のほか」。文政二(一八一九)江戸中村座初演。信濃屋の娘お半と帯屋長右衛門(ハハ)江戸向島瀬川での道行。他に、蘭八、常警津、富本などの各流にも同じ俗称の曲がある。【因園】**名** 余之。【おはん】**名** 代名。おまえ。きみ。*同志の人々(山本有三)「おはんらは、どこまで人がいいのだ」。【因園】**名** 余之。【おはん】**名** 鹿兒島県04。【おはん】**名** 御婆(おば)【おはらめ】祖母や年寄りの女を親しんで呼ぶ語。おはあさん。*體の皮(う)上司小剣(七)「死んだおはんが、子供の時からあったと言てたさかい、余(あ)つぱと古いもんやうな」。【おはん】**名** 因園夜。夜間。茨城県稲敷郡201 福井県大野郡上庄09。【おはん】**名** さい。【因園】夜のあいさつことば。青森県三戸郡04 富山県上新川郡432 (おはんてござんす) 岩手県釜石130 (おはんてがす) 宮城県仙台148 (おはんておせえやす) 福島県会津173 (おはんてがす) 群馬県利根郡216 埼玉県秩父242 (おはんてごいす) 山梨県南巨摩郡512。【おはん】**名** になりました。【因園】夕方から夜にかけてのあいさつことば。福島県石城郡09 群馬県21 埼玉県秩父242 神奈川県286 新潟県407 長野県北安曇郡514。【おはん】**名** (お)は接頭語。臣下のめしをいう女房詞。主上のものを「御膳(ごぜん)」というのに対する。転じて、めしの丁寧語。*御湯殿上日記「天正七年五月三日」この御所にひるばかりみな御はん一人づつまいらせ候。*洒落本・文選臥坐「東北の雲談(と)ても御ちそうにわたしにはお飯(はん)をすこし」。【おはん】**名** (お)は接頭語。貴人の用いる脚のついた高い食卓(日葡辞書)。【おはん】**名** (お)は接頭語。【因園】飯じやくし。しゃもじ。富山県東礪波郡・岐阜県山県郡050。【おはん】**名** 江戸幕府の職制。江戸城警衛に当たった大番頭、書院番頭、小姓組番頭、新番頭および十人番頭の総称。いずれも輩下に組頭、組衆がいた。大坂城二条城へも出向いた。【2】江戸時代、水戸、尾張、紀伊三家の職制。幕府の使番に当たるもので、御使を任務としたもの。*尾張張諸臣十二格「御用列以上名古屋書三」二御番頭之儀、他所へは大番頭と唱申候。*尾張藩武家命令完事「延宝七年二月十五日(名古屋書三)二御番頭、江戸へ御使繁く、近年は公義より人差にて御使相勤候儀も度々有之に付」。【おはん】**名** (お)は接頭語。夕暮れのあいさつことば。こんばんは。福島県などという。

おはん【おはん】**名** 歌舞伎所作事。清元。二世松田治助作詞。清沢万吉作曲。本名題「道行思案余(みちゆきしあん)のほか」。文政二(一八一九)江戸中村座初演。信濃屋の娘お半と帯屋長右衛門(ハハ)江戸向島瀬川での道行。他に、蘭八、常警津、富本などの各流にも同じ俗称の曲がある。【因園】**名** 余之。【おはん】**名** 代名。おまえ。きみ。*同志の人々(山本有三)「おはんらは、どこまで人がいいのだ」。【因園】**名** 余之。【おはん】**名** 鹿兒島県04。【おはん】**名** 御婆(おば)【おはらめ】祖母や年寄りの女を親しんで呼ぶ語。おはあさん。*體の皮(う)上司小剣(七)「死んだおはんが、子供の時からあったと言てたさかい、余(あ)つぱと古いもんやうな」。【おはん】**名** 因園夜。夜間。茨城県稲敷郡201 福井県大野郡上庄09。【おはん】**名** さい。【因園】夜のあいさつことば。青森県三戸郡04 富山県上新川郡432 (おはんてござんす) 岩手県釜石130 (おはんてがす) 宮城県仙台148 (おはんておせえやす) 福島県会津173 (おはんてがす) 群馬県利根郡216 埼玉県秩父242 (おはんてごいす) 山梨県南巨摩郡512。【おはん】**名** になりました。【因園】夕方から夜にかけてのあいさつことば。福島県石城郡09 群馬県21 埼玉県秩父242 神奈川県286 新潟県407 長野県北安曇郡514。【おはん】**名** (お)は接頭語。臣下のめしをいう女房詞。主上のものを「御膳(ごぜん)」というのに対する。転じて、めしの丁寧語。*御湯殿上日記「天正七年五月三日」この御所にひるばかりみな御はん一人づつまいらせ候。*洒落本・文選臥坐「東北の雲談(と)ても御ちそうにわたしにはお飯(はん)をすこし」。【おはん】**名** (お)は接頭語。貴人の用いる脚のついた高い食卓(日葡辞書)。【おはん】**名** (お)は接頭語。【因園】飯じやくし。しゃもじ。富山県東礪波郡・岐阜県山県郡050。【おはん】**名** 江戸幕府の職制。江戸城警衛に当たった大番頭、書院番頭、小姓組番頭、新番頭および十人番頭の総称。いずれも輩下に組頭、組衆がいた。大坂城二条城へも出向いた。【2】江戸時代、水戸、尾張、紀伊三家の職制。幕府の使番に当たるもので、御使を任務としたもの。*尾張張諸臣十二格「御用列以上名古屋書三」二御番頭之儀、他所へは大番頭と唱申候。*尾張藩武家命令完事「延宝七年二月十五日(名古屋書三)二御番頭、江戸へ御使繁く、近年は公義より人差にて御使相勤候儀も度々有之に付」。【おはん】**名** (お)は接頭語。夕暮れのあいさつことば。こんばんは。福島県などという。

おはん【おはん】**名** 歌舞伎所作事。清元。二世松田治助作詞。清沢万吉作曲。本名題「道行思案余(みちゆきしあん)のほか」。文政二(一八一九)江戸中村座初演。信濃屋の娘お半と帯屋長右衛門(ハハ)江戸向島瀬川での道行。他に、蘭八、常警津、富本などの各流にも同じ俗称の曲がある。【因園】**名** 余之。【おはん】**名** 代名。おまえ。きみ。*同志の人々(山本有三)「おはんらは、どこまで人がいいのだ」。【因園】**名** 余之。【おはん】**名** 鹿兒島県04。【おはん】**名** 御婆(おば)【おはらめ】祖母や年寄りの女を親しんで呼ぶ語。おはあさん。*體の皮(う)上司小剣(七)「死んだおはんが、子供の時からあったと言てたさかい、余(あ)つぱと古いもんやうな」。【おはん】**名** 因園夜。夜間。茨城県稲敷郡201 福井県大野郡上庄09。【おはん】**名** さい。【因園】夜のあいさつことば。青森県三戸郡04 富山県上新川郡432 (おはんてござんす) 岩手県釜石130 (おはんてがす) 宮城県仙台148 (おはんておせえやす) 福島県会津173 (おはんてがす) 群馬県利根郡216 埼玉県秩父242 (おはんてごいす) 山梨県南巨摩郡512。【おはん】**名** になりました。【因園】夕方から夜にかけてのあいさつことば。福島県石城郡09 群馬県21 埼玉県秩父242 神奈川県286 新潟県407 長野県北安曇郡514。【おはん】**名** (お)は接頭語。臣下のめしをいう女房詞。主上のものを「御膳(ごぜん)」というのに対する。転じて、めしの丁寧語。*御湯殿上日記「天正七年五月三日」この御所にひるばかりみな御はん一人づつまいらせ候。*洒落本・文選臥坐「東北の雲談(と)ても御ちそうにわたしにはお飯(はん)をすこし」。【おはん】**名** (お)は接頭語。貴人の用いる脚のついた高い食卓(日葡辞書)。【おはん】**名** (お)は接頭語。【因園】飯じやくし。しゃもじ。富山県東礪波郡・岐阜県山県郡050。【おはん】**名** 江戸幕府の職制。江戸城警衛に当たった大番頭、書院番頭、小姓組番頭、新番頭および十人番頭の総称。いずれも輩下に組頭、組衆がいた。大坂城二条城へも出向いた。【2】江戸時代、水戸、尾張、紀伊三家の職制。幕府の使番に当たるもので、御使を任務としたもの。*尾張張諸臣十二格「御用列以上名古屋書三」二御番頭之儀、他所へは大番頭と唱申候。*尾張藩武家命令完事「延宝七年二月十五日(名古屋書三)二御番頭、江戸へ御使繁く、近年は公義より人差にて御使相勤候儀も度々有之に付」。【おはん】**名** (お)は接頭語。夕暮れのあいさつことば。こんばんは。福島県などという。

れる。*雑俳・柳多留六「よめの留守孫も味方におひきさみ」

おひきす【御引摺】名「お」は接頭語 ①着物の裾を長く引いて歩くこと。また、そのように仕立てた服。*破垣内田魯庵「一夜の御奉公してゐるんだらう。爾(ごう)とも、でなけりやア那樣(あん)な者(しや)れたお曳摺(ヒキズリ)は出来ねエワナ」

*倫敦消息(夏目漱石)「家の内で御引ずりには不賛成もありませんが、外であんな長い裾を引きずって歩行するのはあまり体裁の善いものではありませんね」

②「裾を引きずって」の意(か)ら。また、そのように女。*滑稽本「早変胸機関(な)にもかにもおればかりだに、そのまづ面倒が見られぬとは、よくよくのお引(ヒキ)ずり様だ」*平凡(ニ)葉亭四迷(六)「阿母(おふくろ)はお引摺と来てゐるから」

余之(〇)

おひきだす【誘出】「他サ五(四)」だましてさそい出す。おひきだす。*浄瑠璃・持統天皇歌軍法「三三母の籠告らうしごと世に知らせ。おひき出さんと謀(はか)れども」

*雪中梅(未広鉄腸)下(五)夫(あ)の女を此の内へ三度も誘(オビ)き出し」*明暗(夏目漱石)八三誘(ヲビ)き出されど知りながら、彼女はつ(斯)か(う)いて訊(き)き返さなければならなかつた」

余之(〇)

おひきたて【御引立】名「お」は接頭語 特に目をかけて援援することをその後援者を敬つていう語。*花間鶯(未広鉄腸)中(一)「どうか此後御引立(オ)ヒキヲテを願ひます」

*社会百面相(内田魯庵)犬物語(且)那のお引立に預(か)らうといふ野心」

余之(〇)

おひきのうし【ひきはし】御引直衣【名】「お」は接頭語 天皇の、束帯を用いる時以外の日常の行事に着るもの。冬は表白綾に小葵の御紋、裏は紫生絹(すずし)、夏は薄物で、色は二藍(ふたあき)、文様は三重櫛(みえだすき)、紅の張袴。御下直衣(おさげのうし)。*増鏡(九)草枕「上(う)へは八にならせ給へば、いと小さくうつくしげにて、びづらゆひて、御引直衣・打御衣(うちおんぞ)は、はり袴たてまつれる御気色、おとなおとなしうめでたく御引する名」

おひきまわし【ひきはし】御引回【名】「お」は接頭語 指図してあれこれ働かすこと、転じて、目をかけることを、その動作主を敬つていう語。*浮世草子・武家義理物語(六)四「誠の兄弟(きやうだい)ぶんにおほしめされ、御引廻(ヒキマハ)しに預り度(た)きと理をつくして申せば」

余之(〇)



御引直衣 <枕草子(絵巻)>

おひきよせる【誘寄】「他サ下(一)」おひきよす「他サ下(二)」だまして招き寄せる。あやつつて、ある場所に近寄らせる。*太平記(八)「摩耶合戦事(態(わざ)と)敵を難所に帯(ヲビ)き寄(ヨ)せ」

*浄瑠璃(二)二段「二」盗人共をおひきよせ、洩(は)れさす討(う)ち申すべし」

*夏目漱石(一)六「然し私は誘(ヲビ)き寄(ヨ)せられるのが厭(いや)でした」

余之(〇)

おひきわ【き】は「帯際」名 帯の結びざわ。帯をしめる所。*栄花(峰)の月「御をびきはけさやかに見えたるなど、様々御目のとまりをかし見奉らせ給へ」

*塩原多助(一)代記(三)遊亭円朝(四)「駆け寄て突然(いきなり)娘の帯きは取(と)り引(ひ)く」

余之(〇)

おびきん【帯筋】名 鉄筋コンクリート柱の主鉄筋を、一定間隔ごとに横方面からため、主鉄筋を固定させるための細目の鉄筋。フープ。フープ筋。帯鉄筋。余之(〇)

おびく【御比丘】名「お」は接頭語、びくは「びく(比丘尼)の略」尼の姿で売春した私娼。びくに。*仮名草子(可笑記)「一」とせ浄土の上人、おむりやうと申すおびくと深く中なりけるが」

*浮世草子(好色訓蒙)泉上人、人倫「つとめにことかかさぬお比丘は、紙も相立つかひ」

おびく【誘】「他カ四」(「招」をき引く)または「帯引く」の変化した語か、「おびく」か「びく」か、かなづかい未詳)だましてさそ。あざむいて引き寄せる。*太平記(一)四「矢矧(鷹坂)手超河原闘事(射)手を河中の洲崎へ出し、遠矢を射させてぞ帯(オビ)きける」

*運歩色葉(偽引)ヲビキ、人情本(春色辰巳)四「序(すま)を伺ふ忍びの術、客(を)をびくは日文(ひ)ぶみの迎ひ」

*近世紀聞(染崎延房)六三「姦党の兵をもて敵を引(ヲビ)かんと謀りし程に」

余之(〇)

おびく【招引】の義(大言海)。(2)人をオ(帯)ビテヒキ(引)の義(和訓栞)。(余之(〇))

色葉(名義)文明(伊原明広)正(豊原黒本)易林(書)してあるところから)中国古

代の鏡(よるい)の胸につけた鬼面の形。雅楽の「太平楽」などの装束の帯の上にも着ける。大きき約一五センチ。厚さ約七・五センチ。余之(〇)

おびく【御比丘】名 出家した女性の敬称。*雑俳(宝舟)おびくにんまよが過(り)十月腹(月)雑俳(柳多留)「一」(すて扶持はじむさくなくおびくにん)

おびくらげ【帯水母】名 有櫛(ゆうし)動物オビ



帯 食

クラゲ科のクラゲ。世界の温水域に広く分布し、相模湾や富山湾で採集されている。扁平な帯状で、体長は一層にもなる。体は寒天質で透明。中央に口があり、その両側に一對の短い触手がある。体の表面にある八本の繊毛列の働きと体の屈伸によって水面近くを浮遊する。余之(〇)

おびく【クラゲ】名「名」(クラゲは英 Scypha) 帯状の長方形を全体の数量とし、横の長さを内訳の数量の割合に応じて区切ったグラフ。全体の数量と個々の数量、および個々の数量どうしとの割合を示すのに用いる。余之(〇)

おびく【るま】「帯車」名 巾着(きんちやく)、タバコ入れなどの紐の先端につけて、帯にはさんだとき抜け落ちないように工夫された物。象牙(ぞうげ)、水晶などでさまざまな形に作る。根付け。おびばさみ。*俳諧(毛吹草)「六」満月(や)さながら雲の帯車(正)正(正)俳諧(宝蔵)「三」腰下物(山)の腰の月もや雲の帯(オビ)くくるま」

おびく【るま】「帯邪」名 ①帯のように細長く叩つた部分。また、その開い。*玉露(養)元和(五年)五月七日「速水甲斐守父子、拙者父子、山里の帯曲輪の八二間に五間(ノ)人に取籠め罷在り候」

*雑俳(柳多留)「五二」*結目(名)を残したる帯曲輪」

②城の本丸と、二の丸、三の丸等の間を互いに交通できるように設けた曲輪。腰曲輪。*北越軍談(始末巻)上(糸)民部少輔(義)春從者を帯邪(へ)らしめて」

おひけ【御引】名「お」は接頭語 仕事などが終わりになることをいう丁寧語。終了。*滑稽本(八)笑人四「追加下(吟)味は追っていたす。まづおひけの相すむまでは、物しづかにこやつ取(か)がさぬやうに」

*雑俳(柳多留)「二六」おひけ過(り)お犬は爪で猫を噛み」

*怪談牡丹燈籠(三)遊亭円朝(一三)「最う御引(オヒ)ケにしませうと客間へ帳帳を一杯に吊(つ)りて源次郎を寝かし、お国は中二階へ寝てしまひました」

余之(〇)

おひげ【御髭】名「お」は接頭語 ある人を敬つて、その髭をいう語。転じて、髭をはやした人。余之(〇)

おひげ【塵(ちり)】「おひげ(御髭)の塵を払う」の略。*浮世草子(真実伊勢物語)「二四」しかもふところ子にして寒き風にもあてざる娘を、夜のもてあそび物にやりながら、さられぬやうにおひげのちり」

*浄瑠璃(傾城酒呑童子)「四」お伽(とき)共がお髭のちり。扱(も)熊野(ゆ)の面白さ」

おひげ【塵(ちり)を払う】「御髭の塵を払う」かひげ)人にへつらいこびる者を人名のようにいうこととは。*随筆(柳)談(上)お前(ま)さらずの御髭(ヲヒ)ゲの塵助等は、もとよりさるものにて、知る知らぬ人までも羨(うらや)みたふとがりける」

おひげ【塵(ちり)を払う】「取」(宋)の丁謂(てい)がぬ人までも羨(うらや)みたふとがりける」

いい)が宰相の冠(ころ)じゅん)の髭が吸物で汚れたのを拭いて、たしなめられたという「十八史略」にみえる故事から)目上の人にこびへつらう。おべつかを使う。*雑林金詩集抄(下)「一向世間へ出て人の御ひげの塵をばらうてこそ居るべけれ」

*評判記(雑)物語(茶屋)おひげの塵(チリ)をとれば、程なく粋だての心せられて」

*浮世草子(好色二代男)三「一」此所の御髭(ヲヒ)ゲの塵(チリ)を取やめて、白川の流れの末に、万代よろずよを祝ひの水」

*浮世草子(二)葉亭四迷(二)九「本田が今日僕に或人の所へ往(つ)つてお髭の塵を払はないかと云ったから、失敬な事を云ふと思つて」

おひげ【読む】他人の弱点をみつめて、自分の思い通りにする。鼻毛を読む。

おひげ【ちり】「御髭塵」名「御髭の塵を払う」ことの意味)おべつかを使うこと。他人の顔色をうかがうこと。追従(つ)いしょう。*浮世草子(猿)源氏色(芝)居(二)「半飲(り)よ酒に長じ、御ひげちりのけいあんを以て参(ま)りしよ、此人(ら)ならではお頭のけいあんを以て参(ま)りしよ、カウ(帯)鋼(名) 帯状に長くは薄い鋼(は)がね。箱や樽に巻きつけるのに使う。

おびく【こうく】「クワック」(帯)告(名) 書籍のカバーやケースに巻きつける帯状の広告。著者や内容の紹介、推薦文などが書いてある。帯。帯紙。腰巻。余之(〇)

おびさげ【帯下】名 財布やお守りなどにひもをつけて帯などに通してあるもの。*義血俠血(泉鏡花)「渠(かれ)は直(ただ)ちに帯佩(オビ)サゲの裏口を取出して」

おひさま【御日様】名「お」は接頭語。さまは接頭語)太陽をいう。現在では主に女性幼児語として用いられる。*雑俳(西)国舟(ふ)しやなやいっお日様の戻り道」

*滑稽本(四)十八「初(は)じりやいひなさんな、あすこへお日(ヒ)さまが来るとお昼だよ」

*人情本(如)女七種(一)「〇」章(明)日は、お日様(ヒ)サゲのお出なさらぬ中(うち)、早く帰るよ」

*多情多恨(尾崎)紅葉(前)四「二」御日様を拜(ま)やうな心地がして」

余之(〇)

おひさま【御日様】名「お」は接頭語。さまは接頭語)太陽をいう。現在では主に女性幼児語として用いられる。*雑俳(西)国舟(ふ)しやなやいっお日様の戻り道」

*滑稽本(四)十八「初(は)じりやいひなさんな、あすこへお日(ヒ)さまが来るとお昼だよ」

*人情本(如)女七種(一)「〇」章(明)日は、お日様(ヒ)サゲのお出なさらぬ中(うち)、早く帰るよ」

*多情多恨(尾崎)紅葉(前)四「二」御日様を拜(ま)やうな心地がして」

余之(〇)

おひさま【御日様】名「お」は接頭語。さまは接頭語)太陽をいう。現在では主に女性幼児語として用いられる。*雑俳(西)国舟(ふ)しやなやいっお日様の戻り道」

*滑稽本(四)十八「初(は)じりやいひなさんな、あすこへお日(ヒ)さまが来るとお昼だよ」

*人情本(如)女七種(一)「〇」章(明)日は、お日様(ヒ)サゲのお出なさらぬ中(うち)、早く帰るよ」

*多情多恨(尾崎)紅葉(前)四「二」御日様を拜(ま)やうな心地がして」

余之(〇)

おひさま【御日様】名「お」は接頭語。さまは接頭語)太陽をいう。現在では主に女性幼児語として用いられる。*雑俳(西)国舟(ふ)しやなやいっお日様の戻り道」

*滑稽本(四)十八「初(は)じりやいひなさんな、あすこへお日(ヒ)さまが来るとお昼だよ」

*人情本(如)女七種(一)「〇」章(明)日は、お日様(ヒ)サゲのお出なさらぬ中(うち)、早く帰るよ」

*多情多恨(尾崎)紅葉(前)四「二」御日様を拜(ま)やうな心地がして」

余之(〇)

おひさま【御日様】名「お」は接頭語。さまは接頭語)太陽をいう。現在では主に女性幼児語として用いられる。*雑俳(西)国舟(ふ)しやなやいっお日様の戻り道」

*滑稽本(四)十八「初(は)じりやいひなさんな、あすこへお日(ヒ)さまが来るとお昼だよ」

*人情本(如)女七種(一)「〇」章(明)日は、お日様(ヒ)サゲのお出なさらぬ中(うち)、早く帰るよ」

*多情多恨(尾崎)紅葉(前)四「二」御日様を拜(ま)やうな心地がして」

